

胎内銘文のある仏像

——「濃飛の仏像」展に紹介した仏像の中から——

川瀬 善 忠

Buddhist Images Which Bear Signatures and Inscriptions in the Interior of the Bodies

—— from among the Ones Displayed in “THE EXHIBITION OF THE
BUDDHIST IMAGES IN THE NOUHI DISTRICT” ——

Zenchu KAWASE

1. はじめに

岐阜県内に保管されている彫刻（石像をのぞく、仏像、神像、懸仏等）のうち、胎内銘文があり造像年代の判明している資料は約94点ある。（平成2年10月現在市町村史等で確認したもの）

今回、岐阜県博物館では平成2年度特別展「濃飛の仏像」を開催した。開催にあたり平成元年度から県内各地の教育委員会、寺院等の協力を得て、優れた仏像の数々を確認調査することができた。その過程で新しく新長谷寺の木造釈迦如来坐像の胎内から銘文を見つけることができ、この仏像を特別展で紹介した。

ここでは新長谷寺の木造釈迦如来坐像をはじめ、今回の特別展に展示した胎内銘文のある仏像を紹介する。なお、調査及び調査報告書作成にあたって成城短期大学学長清水眞澄氏に多大なご指導ご協力をいただいた。ここに厚くお礼申し上げる。

2. 勸学院 木造釈迦如来立像〈岐阜県安八郡神戸町大字下宮〉 神戸町重要文化財

この像は昭和63年度、平成元年度にかけ京都美術院において解体修理が行なわれたところ、頭部内から墨書銘が見つかり「定審」の造像であることが判明した。

〔法量〕 単位cm

像高	97.0	頭頂～顎	19.7	面幅	10.6	耳張	12.9	面奥	14.4
臂張	29.6	裾張	27.7	胸厚	15.5	腹厚	18.5	足開(外)	15.8

〔形状・構造〕

衲衣、偏衫、裳をまとい、施無畏、与願印を結び、足先を僅かに開き、九重蓮華座(蓮肉踏割れ)上に立つ。

椀材。寄木造り。玉眼。着衣漆箔。肉身金泥。頭と体を三道下で割首とし、頭は耳後で前後に割矧ぎ、体も前後に割矧ぎとしている。さらに両袖を肩で矧ぎ、袖口に手先を差し込み、足先を矧いでいる。珍しい技法としては、裳裾の部分を実材で造り、衲衣の下から差し込んである点で、納入品を込める工夫とも考えられる。

〔銘文〕

頭部内前面の玉眼押さえ木から下辺に次の墨書銘がある。

「元徳三年七月十五日 法限定審作 (花押)」

この像は肉髻が低く、螺髪は比較的大粒に造り、髪際で脹らみをもたせるなど、頭部にも鎌倉時代後期の様式の特徴が顕著に見られる。衲衣の衣文の表現にはかなり個性的な特色があり、衲衣の正面と側面にはかなり厚みをもたせた衣文を造る一方、裳裾の衣文はほとんど省略している。

頭部内の墨書銘によって、元徳3年(1331)仏師定審によって造像されたことが判明できる。

この定審¹⁾について、清水眞澄氏は報告書の中で次のように述べておられる。

『嘉永2年(1327)高知・金剛頂寺浮彫真言八祖像を造立し、徳治3年(1308)神奈川・称名寺釈迦如来立像、正和5年(1316)京都・法金剛院十一面観音坐像を造立した小仏師の1人として名をとどめている定審と同一人物と考えられる。

神奈川・称名寺釈迦如来立像と京都・法金剛院十一面観音坐像は、胎内の墨書銘と納入文書によって、ともに頭に「院」の字を冠したいわゆる院派仏師が大仏師となり(前者は院保、後者は院琬)、その下に小仏師として多くの院派仏師が従事していることがわかる。そしてその小仏師のなかの7人の仏師が重複しており、両像の間に密接な関係が認められる。仏師定審は重複している7人のうちの1人であるから、当然院派の仏所に所属する仏師と推定される。

院派仏師は平安時代以降皇家や貴族の造像にたずさわり、運慶などいわゆる慶派仏師の作風が逞しさや動きを強調するのに対して、優雅さや繊細さを追求しており、鎌倉時代の後半までは京都を中心として造像活動を行っている。』

これまで知られてきた定審の作例は、神奈川・称名寺釈迦如来立像と京都・法金剛院十一面観音坐像が、小仏師として参加しただけの像であり、高知・金剛頂寺浮彫真言八祖像が浮彫像(レリーフ)という特殊なものであるため、仏師定審の作風や技法を知ることは難しかったといえる。その意味で勸学院の釈迦如来立像は年紀の明らかな鎌倉時代の基準作例というだけでなく、当時の有力な院派仏師の1人であった定審の作風や技法を知ることができる貴重な作例といえることができる。



写真1

勸学院 木造釈迦如来立像
(写真1~5)



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6 木造釈迦如来立像頭部
内墨書銘



写真7 称名寺木造釈
迦如来立像
(神奈川)



写真8 法金剛院木造十一面
観音坐像(京都)

3. 新長谷寺 木造釈迦如来坐像〈岐阜県関市新長谷寺町〉

新長谷寺の釈迦堂は方三間の寄せ棟造り、桧皮葺で国の重要文化財に指定された室町時代の建築である。この釈迦堂の本尊である木造釈迦如来坐像の調査をしたところ像底から墨書銘を確認することができた。

〔法量〕

像高	132.5	面長	24.9	頭頂～顎	41.0	耳張	27.9	面張	28.1
臂張	69.5	裾張	65.5	袖張	86.0	胸厚	31.8	腹厚	34.2
膝張	88.0	膝高	左17.0右17.0			膝奥	63.1	像奥	33.8

〔形状及び構造〕

衲衣・裳をまとい、定印を結ぶ。桧材、寄木造り。彫眼。肉身金泥。頭と体を三道下で割首としている。面貌は頬にふくらみを持ち、肩を張り、膝張りに比べて両臂など体の幅を大きくとった形姿に室町時代の作風がうかがえる。

〔銘文〕

膝裏に次の墨書銘がある。

「相列鎌倉長谷深澤里 師子吼山清浄泉寺 釋尊像

濃州武儀郡寄附新長谷寺 二階堂并大佛別當上人養國(花押)」

江戸時代の末期、鎌倉高德院(鎌倉大仏)の復興に尽力した養国上人が、高德院にあった釈迦如来像を関の新長谷寺に寄附したことがわかる。

今後、この仏像の鎌倉から関への伝わり方や、鎌倉大仏と新長谷寺の関係を解明する貴重な手がかりになると考えられる。



写真9 墨書銘が見つかった
新長谷寺木造釈迦如来坐像



写真10



写真11

新長谷寺 木造釈迦如来坐像の墨書銘

4. 高賀神社 木造十一面観音菩薩坐像〈岐阜県武儀郡洞戸村〉岐阜県重要文化財

〔法量〕

像高 91.9	面長 16.5	頭頂～顎 30.0	面幅 17.2	耳張 21.8
面奥 19.9	臂張 49.4	胸厚 16.0	腹厚 20.5	

〔形状・構造〕

天衣，条帛をかけ，裳を着け，両手を屈臂して座る十一面観音像である。

桧材，一木造り。彩色(剝落)。彫眼。頭体部を通し両臂までを含めて一材から彫出。内削りを施し，後頭部割削ぎ，背中に別材の背板を当てる。地髪上の十一面はいずれも植え付けの痕を残すのみ。両手臂から先，膝前は現在欠失している。面相部の彫りは浅く，天衣や条帛は衣文を全く刻まず，簡素な仕上がりである。地方色の濃い像である。

〔銘文〕

背板（巾31.8cm，上下58.4m）に右記の墨書銘がある。天治元年（1124年）という造像年代が明らかな平安時代の基準作例として特に注目されるとともに，県内の胎内銘文のある仏像として最古の像である。

天治元年
 月四日奉造願
 僧 重原氏
 家女高 額田氏
 高橋安 巨
 僧 巨妙
 高橋安行 寂原
 高橋清 家女
 語清元 額田氏
 僧 巨妙
 高橋安行 寂原
 高橋清 家女

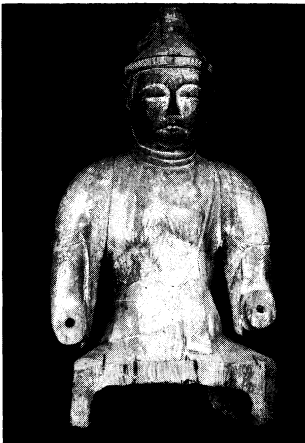


写真12 木造十一面観音菩薩坐像

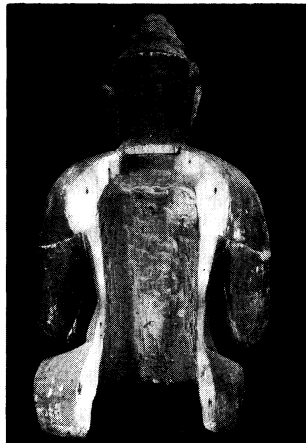


写真13

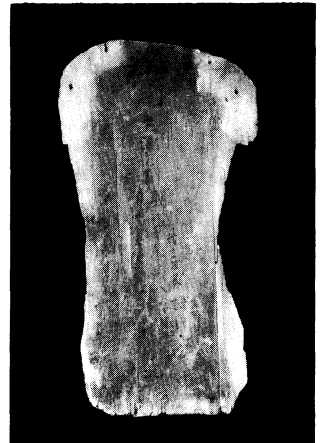


写真14 背板の裏側に書かれた墨書銘

5. 願興寺 木造釈迦如来坐像〈岐阜県可児郡御嵩町〉 国重要文化財

〔法量〕

像高 79.6	面長 15.9	頭頂～顎 24.9	面巾 14.2	耳張 18.0
面奥 19.2	臂張 42.8	裾張 43.0	胸厚 21.1	腹厚 24.1
膝張 55.8	膝高 左10.1 右10.0	膝奥 40.0	像奥 50.1	

〔形状・構造〕

衲衣、裳をまとい、数少ない説法印を結び、八角九重蓮華座に結跏趺坐する。

寄木作り。玉眼。漆箔。肉身金泥。内刳り。螺髪を細かく刻み、着衣の衣文も浅く刻んだところに藤原時代の様式がうかがわれるが、胎内の墨書銘から鎌倉時代の造像とわかる。この像は願興寺所蔵の国重要文化財24軀の中でも、唯一在銘仏像として貴重である。寛元2年（1244）造像。

制作年代の判明する在銘仏像としては県内で3番目に古い像であり、鎌倉時代中期の基準作例として貴重である。このほか応永27年（1420）と文明11年（1479）の修理銘も記されている。

張りのある頬につり上がった目をもち厳しい表情をしているが、体には力強さがあまり強調されず、全体として穏健な作風といえ、均整のとれた美作である。

<p>〔銘文〕</p> <p>眼 法</p>	<p>仏師康信</p>	<p>（同）顔内墨書修理銘</p>	<p>本願禪止庵主 文明十一年正月十八日</p>	<p>（同）頭部内墨書修理銘 奉修利十方檀那 文明十一年正月十八日</p>	<p>（同）像内背部墨書修理銘 道祐禪門 妙阿尼 妙心尼</p>	<p>（同）像内腰部墨書銘 有順大徳 小仏師 定仏</p>	<p>（同）像内墨書銘 寛元貳年 辰甲五月廿三日造立之 勅進聖人観西 大檀那源康能 泰氏</p>
------------------------	-------------	-------------------	------------------------------	---	--	---------------------------------------	--

敬曰 本国播磨国明石郡多聞 □□
 奉修補別当代永明阿闍梨 妙道禪門
 永□法印了円禪尼円阿禪門妙智尼円□禪門
 大工□□□□仏師道□禪門妙観禪尼
 □□□□□□□□□□
 心永廿七年十二月一日 孫二郎

像を造らせた大檀那の源康能は、可児郡中村庄の地頭であった額瀬氏の一族で願興寺の整備に力を注いだといわれる。本像のほか彼が天福元年（1233）から嘉禎3年（1237）にかけて書写した大般若経が当寺に残っている。定仏については文永2年（1265）京都・三十三間堂の千手観音立像を

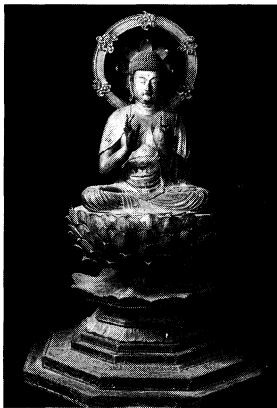


写真15 木造釈迦如来坐像



写真16 像底の墨書銘



写真17

造像した仏師の中に「定仏」の名がみえるが、同一人物かどうかは不明である。この像が結ぶ説法印(転法輪印ともいう)は、修行を終えた釈迦が鹿野園で衆生を前に最初の説法をした時の姿をかたどったといわれ、この印相の釈迦像は全国でも珍しく、ほかに神奈川・極楽寺の像が知られる程度である。

6. その他の胎内銘文

今回の特別展では展示しなかったが、横蔵寺の木造大日如来坐像と木造金剛力士立像(阿形)の中から胎内墨書が確認されているので、それを付記しておく。

横蔵寺 木造大日如来坐像銘文
 (像内背部墨書銘)
 奉造立三尺五大
 タムナツ平重親
 佛師チクセノカウシ
 壽永二年十月
 甲辰

横蔵寺三重塔
 (像内右腰墨書銘)
 聖人唯蔵坊朗
 之佛也
 (像内西足部刻面左膝裏墨書銘)
 供養日
 壽永貳年
 十一月十六日丙午
 阿闍
 (右膝裏墨書修理銘)
 奉御修理

寛文參年
 卯ノ四月吉日
 江州小坂郡八條
 佛師大橋酒兵衛
 (体部底板墨書修理銘)
 美濃國横蔵寺院主良心
 奉修理
 弘安七年三月上旬
 漆工左近尉
 藤原友

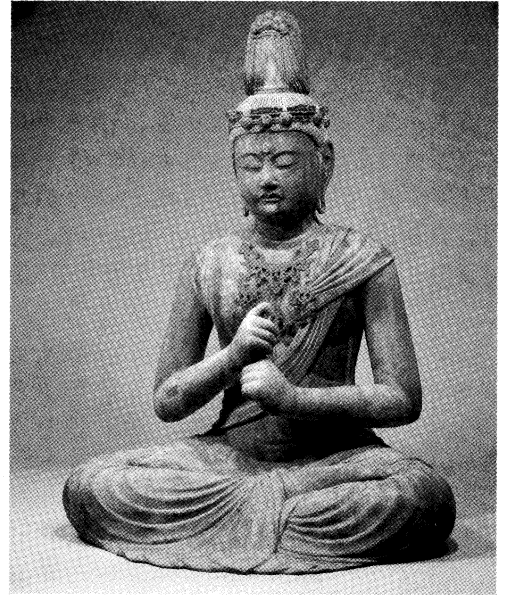


写真18 木造大日如来坐像 国重要文化財



写真19 木造金剛力士立像(阿形) 国重要文化財

横蔵寺 木造金剛力士立像銘文
 (阿形像後内墨書銘)
 注進ノ建長八年丙辰七月十九日ノ之ノ仏師五人坪坂住大仏師法
 眼和尚位定慶小仏師越後法橋上人ノ讚岐法橋上人長慶僧
 越中朝慶 僧讀岐ノ已上人ノ当山院主良寛 衆徒等三十八
 人小人三十人小法ノ三十三人ノ上人教云々ノ堂五間四面三
 重塔ノ皮一間四面新室乗師日光月光十二神鐘樓一字檜皮湯屋一字三間
 皮書東臺二丁光白山ノ檜皮ノ皮ノ棧門一字檜皮地主權宝殿ノ
 一字ノ一字ノ三間ノ皮ノ五間四面弥陀三ノ仏ノ自
 余僧坊十四坊也已上ノ頭宗密宗兼字処
 (同 像内棧木墨書修理銘、その一)
 本堂山王塔波千鉢地藏堂鐘樓白山金剛童子ノ大房中房ノ
 阿弥陀坊大ノ房也此三王者文安二年六月二日大風
 同堂共破壊末仁王堂無造立ノ行林房督坊ノ猿右丸松房丸入道
 丸
 (同、その二)
 学頭房阿陀陀房法印尊ノ平野西保田ノ院心舜ノ
 巴紀伊國ノ当山院主幸慶澄栄春門勝栄幸ノ慶慶俊源栄
 俊栄大親公生年八歳ニ其年ノ行事奄室房勝栄阿闍梨ノ願主大
 西房幸慶律師ノ仏師道破薩摩国住人也 大工坂本次良左衛門也
 文明九年丁五月廿四日ノ此三王再ノ者谷汲山法輪房ノ也華
 嚴寺千鉢地藏菩薩堂ノ立其材木所望依事也ノ道破禪主也

注1) 定審については清水真澄成城短期大学学長が近く発表される『称名寺の造像にかかわった仏師』の論文の中で触れられる予定である。